

Rapport（ラポール）とは、仏語で「信頼と親愛の絆」を表しています。  
多摩大学広報紙「Rapport」は、多摩大学と多摩大学サポーターをつなぐ  
コミュニケーション紙です。

発行者 多摩大学 発行日 2012年7月30日  
東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1 TEL:042-337-1111 FAX:042-337-7101  
<http://www.tama.ac.jp/>

2012

Number

078

TAMA UNIVERSITY

# Rapport

## Contents

学長メッセージ	P.02
カリキュラムのご案内	P.03
キャリア支援講座 インターフェミ／リレー講座	P.04
多摩大学体育会フットサル部設立	P.05
News	P.06
田村学園概要	P.07
写真で見る多摩大学の歴史①	P.08



インターフェミの授業風景

## 学長メッセージ President's Message

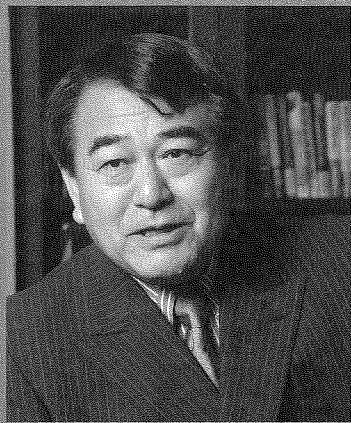
寺島 実郎 Jitsuro Terashima

### Profile

(一財) 日本総合研究所理事長

(株) 三井物産戦略研究所会長

1947年北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了後、三井物産入社。米国勤務等経て、99年より三井物産戦略研究所所長、2009年から同会長。また01年日本総合研究所理事長、06年から同会長、10年同理事長。文部科学省・日中韓大学間交流・連携推進会議委員、宮城県・震災復興会議委員、経済産業省・資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会基本問題委員会委員などを歴任。94年石橋湛山賞受賞。主著は『世界を知る力』、『世界を知る力 日本国生編』(PHP新書)、『脳力のレッスン I・II・III』(岩波書店)、『二十世紀から何を学ぶか(上下巻)』(新潮選書)ほか。



## 人間力をベースとした問題解決力を備え、 時代の課題に向き合う「志」ある人材の育成に取り組んでいます。

多摩大学は、1989年の開学以来、貫して「実学」を追求してきました。実学とは、正確な時代認識と問題解決力を養うことであり、企業をはじめ自らが属する組織、あるいは社会が直面する課題を解決できる能力を備えた人材の育成に取り組んできました。

人材の育成にあたって、私たちが大切にしているのは「ゼミを中心としたカリキュラム」です。私が学長就任時から多摩大学を小規模ではあるが誇り高い極めて価値のある大学にすべく取り組んでいることがあります。

その1つが、私が主宰する社会工学研究会(インターゼミ)です。神田神保町に近い歴史ある九段下という場所に多摩大学のサテライトを設けて、2つの学部と大学院、そして教員10名でおこなう全学横断型のゼミです。インターゼミではフィールドワークと文献研究を徹底的に行い、必要に応じて外部の識者の知恵も借りて研究テーマに取り組むことを求めています。ゼミ生には小手先のスキルやノウハウを学ばせるのではなく、じっくりと研究テーマに向き合うことで、問題解決力を身につけさせたいと考えています。直面した問題に対して「君ならどうする?」と問われた時に、きちんと答えられる人間を、時間をかけて育てたいと思っています。問題解決力に加えて、ゼミを通じてもうひとつ身につけさせたいのが「人間力」です。誠実に黙々と組織の下支えができる人材、周囲の人が「一緒に仕事がしたい」と思う人を社会に送り出したいと考えています。ゼミという、いわば手作りの教育手法は、そうした人材の育成に最適です。この思いは他のゼミを担当する教員にも共通するものであり、本学の特色を形作る要因のひとつになっています。

もう1つが、私が監修するリレー講座(現代世界解析講座)です。学長就任の前年から開講して、今年で5年目に入りました。600名収容の教室で半分は学生、半分は社会人が一緒に講座を受講します。春学期12回、秋学期12回と年間24回

の講座を開講し、私自身も6回登壇しますが、その他にいま世界に向けて発信している各界の硕学が登壇しています。学生には、本当に時代と向き合って発信している人のものの見方や考え方、世界観をできるだけ吸収してもらいたいと思っていますし、毎週300人以上の地域社会の人が聴講しているという大学の社会貢献にもなっているこの講座を核として、今後質的にも量的にも発展させて、より社会人を巻き込んでいく大学にしていきたいという想いを持っています。

また、多摩という言葉に込められた様々な意味を大切したいという考え方から「多摩学」に教職員・学生が取り組んでいます。多摩川と相模川との間に挟まれた地域を我々の考える広域の「多摩」とし、この地域の持つ意味を理解することから世界認識が深まるというのが私の考えです。グローバルという言葉とローカルという言葉の造語で「グローカリティ」という言葉があります。私自身が世界を動いてみてわかることはグローバルな世界で成功するためにこそ地域に深く深く根ざす必要があり、「多摩グローカル人材」を育成していきたいと考えています。

現在の日本が直面する課題は、勢いを増すアジア・ダイナミズムに対して、どのように向き合うかということです。たとえば開学当時、日本の貿易の約30%はアメリカとのものでしたが、今や10%強程度にまで落ち込み、反対にアジアとの貿易は、50%を超えるまでに大きく成長しています。それに伴って産業や経済の基盤も変化し、日本という国が、これからどこに向かって歩むべきか、改めて問われることになっています。

こうした時代の最前線で活躍できる人材を送り出すために、これまで以上に、グローバルとローカル、両方の視点を備えた「地政学的な知」を身につけさせることに取り組まなければならないと思っています。

アジアにも、地域社会にも開かれた大学。それが私たちの目指す姿です。

## 経営情報学部のカリキュラム

### 3つの履修モデル

経営情報学部では、産業社会の問題解決の最前線に立つ志をもった人材を、問題解決力を養うゼミプログラムと、実践的知識を身につける講義プログラムの2本の柱で育成しようとしています。

ひとことで言えば「多摩グローカル人材」。

社会のIT化、グローバル化、地域革新という時代の変化、そして社会が求める人材の変化に即応するため、2012年度より三つの履修モデルを設置しました。学部生が将来、自分の志をどのように社会に活かしていくのか、「地域ビジネス」「グローバルビジネス」「ビジネスICT」という3つの分野別の履修モデルが用意されています。

### 地域ビジネス

現場とかかわり地域の抱える課題を創造的に解決できる、地域イノベーション人材を育成

多摩地域は優秀な企業が地元にもアジアにもネットワークを伸ばしており、日本の先進的周縁地域といって過言ではありません。その多摩を主なフィールドにして、学生と教員が問題解決に取り組みます。多摩大学の学生・OBの多くは、多摩地域、といつても南多摩や相模原、川崎、横浜まで関係する広域圏の出身者です。この多摩で学生が就職し、企業と大学が連携することが始まっています。

学内には「地域活性化マネジメントセンター」が創設され、企業や自治体が主体となった地域ビジネスと学生を結びつける場を提供し、地域の問題解決プロジェクトも約20プログラムが立ち上がっています。プロジェクトを進める中で、企業の現場、あるいは企業・自治体・NPO、さらにはそれら連携のマネジメントを体験し、地域がいかに変革されていくのかを現場からの目線で観察し、提案をつくることになります。

さらに多摩に限らず、全国でどのような地域ビジネスが行われ、社会を変えつつあるのか。学生と教員は共に地域の「現場」に参加する機会が増えていくことになります。進路としては、流通やサービス業など地域ビジネスの応用が求められる分野や、自治体、NPO・NGO、ベンチャー企業等が想定されています。



諸橋 正幸 教授  
副学長

### グローバルビジネス

アジアダイナミズムに真正面から向き合えるプロジェクトマネジメント人材を育成

「グローバルビジネス」はビジネスの最前線に位置するものですが、特に意識しているのは日本を含むアジア圏の変革、すなわち「アジアダイナミズム」です。

グローバルビジネスの動きを理解する世界潮流系の履修科目には、アジア経済、国際経済、国際経営入門、国際関係、多国籍企業、比較文化論、日本経済論、アジア近代史などがあり、学生はアジア経済の専門家である教員から最前線の事例を学びます。また言語系では英語の他に、韓国語、中国語の授業が充実していることも多摩大学の特徴です。

グローバルビジネスにおける語学は、言語を使って問題解決するための手段となります。進路としては、サービス業や製造業、商社、金融関連、外資系企業、NGOなどが想定されています。



久恒 啓一 教授  
経営情報学部長

### ビジネスICT

顧客視点とマーケティング感覚を身につけた、技術に強いICT人材を育成

現在のビジネス世界ではICT（情報通信技術）が不可欠で、これを使いこなせる人材を多くの企業が求めています。このカリキュラムの目的は、顧客視点とマーケティング感覚を身につけた、技術に強いビジネスICT人材を育成することです。

ビジネスICTの教育では、特に「人文科学」「自然科学」の枠を越えたトランスディシプリンにもとづいて教育を実現しようとしています。顧客が求めるものをICTで具体化して提案するというマーケティングとICTを併せ持った「ICTマーケター」。また、プログラミング技術などを組み合わせて、顧客が求める新しい何かと共に作り上げていく「ICTイノベーター」。例えばバーチャルリアリティなどを有効的に応用することで、私たちの生活をさらに向上させることができるでしょう。ビジネスICTでは、このような2つの人材像を絞り、顧客感覚、顧客視点で顧客が欲する技術を提供していくことを目指しています。

ICTのスキルは1年生のときから一つ一つ積み重ねていくことが大切です。3年生になったとき、初めてこれまで培ったプログラミングやweb、マーケティングの技術が活かされ、顧客にも満足できるICTサービスについて研究できるようになるのです。もちろんグローバルな視点も必要ですので英語は必須です。



今泉 忠 教授

### グローバルスタディーズ学部のカリキュラム

多摩大学の基本理念「国際性」「学際性」「実際性」のうち、「国際性」を軸に湘南キャンパスに創設された学部で、今年6年目を迎え、600名が在籍しています。

少人数クラスを原則とし、授業は基本的に英語で行われ、語学力、コミュニケーション力、主体性を養成しています。学生は海外の提携大学への短期・長期留学体験、2年次のインターンシップにおける実務経験など様々なチャレンジの機会を得ることで、スキルを磨くことができます。卒業後の進路を視野に入れた3つの専門コースを用意し、将来の志望を考え、2年次から選択します。「ホスピタリティ・マネジメントコース」は、旅行・観光・サービスなどの産業、「インターナショナル・ディベロップメントコース」は、国際機関・JICAなどの国際貢献、「グローバル・ビジネスコース」は、商社・国際物流などの企業が進路として想定されています。基礎教育として教養系科目（社会学・人類学・心理学）、環境問題・経済・情報通信などを組み合わせて履修します。異文化理解、コミュニケーション力、自主性、チャレンジ、チームワークは海外でも国内でも必要な要素です。グローバルとローカルの感覚を兼ね備え、国内での活躍も視野に入れたグローバル人材の育成を目的としています。また学生たちが自主参加するコミュニティ活動は、地域の方々に大変喜ばれています。



松林 正一郎 教授  
グローバルスタディーズ学部長

## キャリア支援講座 人間力・社会人力向上プログラム「IYOKUBA」を今年度から開講

### 楽しみながら自己表現力を高める

昨年5月から年末の就職活動スタート時期まで従来通り3年生に対し、『履歴書・ESの書き方』、『自己PR作成』、『仕事研究・業界研究』などのスキル的な部分についてガイダンスを行ってきましたが、いざ就職活動が始まってみるとっと前段階（『物事（就職活動）に自ら意欲的に取組む姿勢』、『場の雰囲気（面接会場など）を読み取る力』、『自己表現力（相手に自分の思いを伝える力』など）がかなり不足していると感じました。また、昨年も回を追うごとに参加率も下がり、学生達にとっては楽しくなければならないという事（授業ではなく単位にならない為）を感じました。

これらの2点から多摩大生向けに人間力向上・社会人力向上のプログラムを模索していたところ、音楽座ミュージカル

が主催している『表現力向上セミナー～なりきり力～』に参加して、これだ！と感じ今回の『IYOKUBA』を開講しました。

（キャリア支援課主任 早河智春）



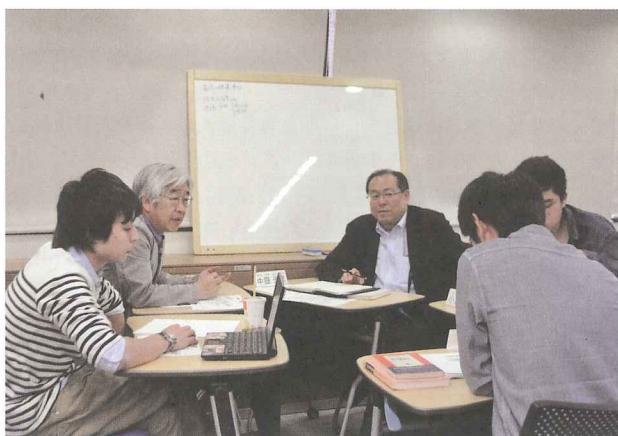
IYOKUBA：場の共感【ワークショップ】やればできる／自分の未来を文字で表しペインティング

### 社会工学研究会（インターゼミ）

### 寺島実郎学長主宰の全学横断型ゼミ

寺島学長が主宰する全学横断型のゼミで、別名「寺島塾」と呼ばれています。学部の枠を超えて、教員、大学院、学部生が、塾形式で切磋琢磨しながら、現代社会の抱える課題について研究します。ゼミ生自身による問題発掘・発見から仮説の提示、そして問題解決にいたるプロセスの中で、創造的問題解決策を提案します。ゼミに参加することで、知的な刺激を受けながら、最先端事例に触れることができます。

1つのチームが1年間をかけて「問題解決型の共同研究」に取り組みます。4年目となる今年度は「アジア・ダイナミズム」「多摩学」「サービス・エンターテインメント（ディズニー）」「震災」「エネルギー・環境」の5つのプロジェクトが進行しています。



「多摩学」チーム グループワーク

### リレー講座（特別講座）

### 寺島実郎監修リレー講座「現代世界解析講座」

寺島実郎学長の産・官・学ネットワークを活かして、国際情勢や経済、国内行政等の各分野における精鋭の専門家を多摩大学に招き、リレー形式で講座を開催しています。多摩大学学生は履修単位として、また地域住民の方々を含む一般社会人や大学院生、卒業生などは聴講生として参加。約600名を対象に多摩キャンパスにて、春学期と秋学期、通年で全24回の講義が行われます。

2008年度から始まったリレー講座の2012年度テーマは「3.11の衝撃、そして世界の構造変化—我々はどこに向かうべきか」。世界各地域の現況や海外から見た日本、日本国内の諸問題などを最新情報を基に多面的に取り上げることで、現代が抱える問題意識の提起を目指します。



学生と社会人が一堂に会して受講

# 「多摩大学体育会フットサル部」設立!! 大学フットサル日本一を目指し始動。

2012年5月、多摩大学がひとつになるシンボルとして、初の体育会「フットサル部」が設立されました。フットサルでトップクラスの福角有紘氏を監督に迎え、気概をもった精鋭が揃い、多摩大学の名誉と期待を背負って始動。数年後の大学日本一を目指します。学生がさまざまなことに取り組みながら、スポーツに打ち込むことで成長し、評価される存在となり、大学4年間をより充実したものにすることが、フットサル部の目的です。

現在、アリーナで土日、朝練を含め週5回の練習が行われています。6月2日（土）に開催された初の公式戦「第9回東京都大学フットサルカップ」では、1回戦の対戦相手「法政大学サルケル」に4-3で初勝利をおさめ、大きな一步を踏み出しました。7月末からは、2012年度の公式戦「東京都大学フットサルリーグ」が開幕。チームは開幕戦に向けてベースづくりとトレーニングに取り組んでいます。多摩大学フットサル部の活躍にご期待ください。

## 福角 有紘 監督からのメッセージ

### 大学フットサル日本一を目指して

【略歴】ルネス学園（滋賀）～ASPA,F.C（奈良）～BORDON（奈良）～MAG's Futsal Club（大阪）～PREDATOR Urayasu（千葉）（BORDON、MAG's 時代はキャプテン）、2000年、2004年フットサル世界大会日本代表候補、第3、11回全日本フットサル選手権全国大会で優勝、06年インターチンチネンタルカップ（世界クラブ選手権）第5位、02年スペイン、バルセロナF.Cに3ヶ月のフットサル留学、スペイン2部リーグ Olesa F.C 練習生など。

僕はフットサルを通して、夢や目標を掲げ必ず達成するのだという強い意思をもって頑張れば、誰にでもチャンスはあるものだと学びました。今後は指導者としてたくさんの方々のサポートをしていきたいと思います。僕の経験を少しでも多くの人達に伝えていき、日本のフットサルが本物になるよう努力したい。そして伝えていく中で選手たちから多くのことを学び、共に成長していきたいと思っています。学生達には、手を抜かず全力でプレイすることが目標達成のための大切な要素だと伝えています。個々のキャラクターや特長を活かし、熱い気持ちをもって助け合い戦っていくチームをつくり、行動、姿勢すべてにおいて大学日本一を目指します。



福角 有紘 監督  
多摩大学体育会フットサル部監督  
1978年2月10日生  
兵庫県出身

## 杉田 文章 教授からのメッセージ

### 多摩大学が一つになるためのシンボルに

小さいエリアで非常にスピーディに動いて勝つ。これは小さい大学が小さいがゆえの俊敏さや機転の利かせ方で相手に勝っていくという、まさに多摩大学のあり方を象徴しています。「多摩大学体育会フットサル部」は多摩大全体が関心をもち、応援する共通のコンテンツとなり、教員、卒業生、すべての関係者が一つであることを象徴してくれる存在になります。これは多摩大にとってものすごく意味があることだと思うのです。こういう環境の中で、フットサルの選手としてみんなの期待を背負いながら大学生活を送ることは、なによりも選手の成長につながる、と監督とともに確信しています。ほとんどの学生がフットサルのメンバーを知っていて、キャンパスの中ですれ違ったとき「頑張れよ!」と声をかけられるような、そういうクラブにしたいと思います。レベルが高い低いではなく、夢を持ってどれだけ頑張って乗り切れるかということにこそ意味がある。能力をもった学生のポテンシャルが花開く場所がやっとできました。やるからには数年間で日本一を目指せるチームに育ってくれたらと思います。彼らにはもちろん頑張ってもらいたいけれど、我々もとことん応援するというスタンスでいきたいと思っています。



杉田 文章 教授  
多摩大学体育会フットサル部顧問



## (株) YAMATO と多摩大学が産学連携し、新プロジェクトがスタート

3月9日(金)、多摩大学と株式会社YAMATO(川合アユム代表取締役社長)は、産学連携教育の覚書を締結しました。2012年度プロジェクトゼミ「ベンチャー企業の製品コンセプトづくりと営業」(豊田裕貴教授と趙佑鎮教授)の中で、(株)YAMATOから出された課題を学生が分析し、その解決策を導き出すプロセスを経験します。実践的な学びを得つつ、株式会社YAMATOにも貢献することが目的です。ゼミで学生は、(株)YAMATOの商品である銀イオン水「mana-tura(マナチュラ)」の販売企画を実習・実践形式で行っています。



左から、豊田教授・川合社長・諸橋副学長

## 平成24年度 経営情報学部、グローバルスタディーズ学部合同入学式

4月5日(木)10:10～パルテノン多摩大ホールにて、経営情報学部、グローバルスタディーズ学部合同で平成24年度入学式を開催し、ご父母の皆様もご参加の中、両学部合わせて522名の新入生を迎えることができました。寺島実郎学長は新入生に向けて、「現代の志塾」を榜標する多摩大学の理念を語り、これから始まる1450日の多摩大学での学生生活を問題意識を持って本気で組み立ててほしいと語りかけました。新入生代表 経営情報学部・土方亜紀さん、グローバルスタディーズ学部・堀案璃さんはそれぞれの今後の抱負を力強く述べました。



寺島学長の前で抱負を述べる土方さん

## 社会工学研究会(インターベン)ディズニー班の研究論文をオリエンタルランド代表取締役社長に手交

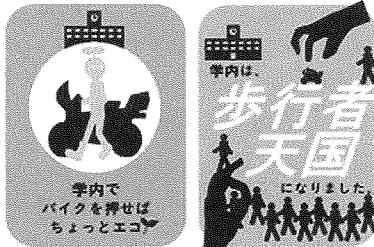
4月16日(月)社会工学研究会塾長の寺島実郎学長より、(株)オリエンタルランド代表取締役社長(兼)COOの上西京一郎様に、ディズニー班の3年間の研究論文が手交されました。社会工学研究会ディズニー班はディズニーを軸にサービス・エンターテインメントを研究してきました。2009年度はディズニーランドにおけるサービス・エンターテインメントの成功要因、2010年度はディズニーキャラクタービジネスの成功要因、2011年度はディズニーにおける人材育成について、3年間研究を積み上げ、2012年度も4年目として継続されます。



論文を手渡す寺島学長と上西社長

## 中村その子ゼミ4年生が学内のマナーアップ呼びかけポスターを制作

2011年度秋学期から、学内の喫煙ルールとバイク乗り入れルールが変わりました。中村その子ホームゼミナールの4年生は、井出佳菜子さんを中心に、ルール変更を学生に周知するとともにマナーアップを呼びかけるポスターを制作し、学内に掲示しました。ポスターの目的はルール順守を強く訴えることですが、命令調ではなく、ほんの少しのユーモアやしゃれを交えて「こころよく」規則を守ってもらい、前向きにマナーアップがなされることを心がけました。固すぎずゆるすぎずという雰囲気のデザインとキャッチコピーになっています。

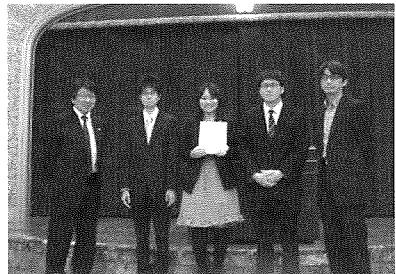


バイク乗り入れポスター

## 多摩大学社会工学研究会(インターベン)「震災と日本再生」チーム復興構想コンテストで優秀作を受賞

「寺島実郎責任監修 復興構想コンテスト～震災復興から日本創生へ～」において、多摩大学社会工学研究会「震災と日本再生」チームが優秀作を受賞しました。4月20日(金)日本工業俱楽部会館にて表彰式が行われ、寺島実郎コンテスト委員長より賞状が授与されました。本コンテストは、若者による新しい視点での構想力あふれるアイデアを募り、広く社会に認知してもらう場を創設することを目的に開催されました。

全国から応募された作品は、いずれも被災地の復興に向けた思いが込められ、充分な基礎研究に基づいた若者らしい斬新で独創的な作品でした。



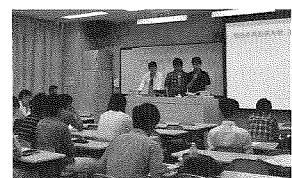
受賞した「震災と日本再生」チーム

## SRC (Student Research Conference 2012夏)

2012年7月14日(土)9:00～多摩キャンパスにて、SRC(Student Research Conference 2012夏)が開催されました。

SRCは、経営情報学部の学生がゼミの研究成果などの発表を行う場です。それぞれのテーマでこれまでの研究成果をパワーポイントを使用して発表しました。3つの教室にわかれ、34の発表の他にポスターセッションとして31の展示を行いました。今回は、学生の目線で多摩大学の事務局をテーマとした課題解決の提案についての発表も行われました。ゼミの枠を超えて教員や学生が多数出席し、質疑応答では熱心な質問やアドバイスがありました。参加者全員が互いに切磋琢磨できる貴重な機会となりました。

発表のテーマ一覧は多摩大学ホームページをご覧ください。



<http://www.tama.ac.jp/topics/news/2012/07/20/SRC2012Summer.pdf>

# 平成 23 年度 学校法人田村学園概要

多摩大学の経営母体である学校法人田村学園は、私立学校として積極的に情報開示をしております。最新の田村学園概要は、以下のとおりです。

〔学校法人 田村学園 貸借対照表〕

貸 借 対 照 表

平成 24 年 3 月 31 日 (平成 23 年度)

(単位 百万円)

資産の部		前年度末	本年度末	増 減
科 目				
固定資産	22,135	21,907	△ 228	
有形 固定 資産	20,673	20,379	△ 294	
土 地	11,992	11,992	0	
建 物	7,575	7,331	△ 244	
そ の 他	1,106	1,056	△ 50	
その他の固定資産	1,461	1,528	67	
借 地 権	0	0	0	
第 2 号 基本金 引当資産	1,200	1,300	100	
そ の 他	261	228	△ 33	
流動資産	3,160	3,967	807	
現 金 預 金	2,160	3,028	868	
そ の 他	1,000	939	△ 61	
資産の部合計	25,295	25,874	579	
負債の部				
科 目	前年度末	本年度末	増 減	
固定負債	338	344	6	
長 期 借 入 金	2	2	0	
退職給与引当金	336	342	6	
長期未払金	0	0	0	
流動負債	968	1,043	75	
短 期 借 入 金	1	1	0	
前 受 金	700	731	31	
そ の 他	267	311	44	
負債の部合計	1,306	1,387	81	
基本基金の部				
科 目	前年度末	本年度末	増 減	
第 1 号 基本金	28,734	28,775	41	
第 2 号 基本金	1,200	1,300	100	
第 3 号 基本金	92	92	0	
第 4 号 基本金	397	397	0	
基本基金の部合計	30,423	30,564	141	
消費収支差額の部				
科 目	前年度末	本年度末	増 減	
消費支出準備金	0	0	0	
翌年度繰越消費支出超過額	△ 6,434	△ 6,077	357	
消費収支差額の部合計	△ 6,434	△ 6,077	357	
科 目	前年度末	本年度末	増 減	
負債の部、基本基金の部、及び消費収支差額	25,295	25,874	579	
・ 学生・生徒等 (人)	田村学園全体 多摩大学 学部 経営情報学部 グローバルスタディーズ学部 多摩大学 大学院 高校 (2)・中学 (2)・幼稚園 (3)	4,839 1,451 588 107 2,693		
・ キャンパス面積 (m <sup>2</sup> )	田村学園全体 多摩大学 その他	115,760 44,913 70,847		

以上、平成 24 年 5 月 1 日 現在

〔平成 23 年度 計算書類多摩大学分 抜粋〕

〔資金収支内訳表〕

〔消費収支内訳表〕

(資金収入) (単位：百万円)

(消費収入) (単位：百万円)

学生生徒等納付金収入	3,740
手数料収入	82
寄付金収入	52
補助金収入	1,136
資産運用収入	16
事業収入	144
雑収入	78
その他	117
前年度繰越支払資金	2,160
合計	7,525

学生生徒等納付金	3,740
手数料	82
寄付金	52
補助金	1,136
資産運用収入	16
事業収入	143
雑収入	78
帰属収入合計	5,247
基本金組入額	△ 141
合計	5,106

(資金支出)

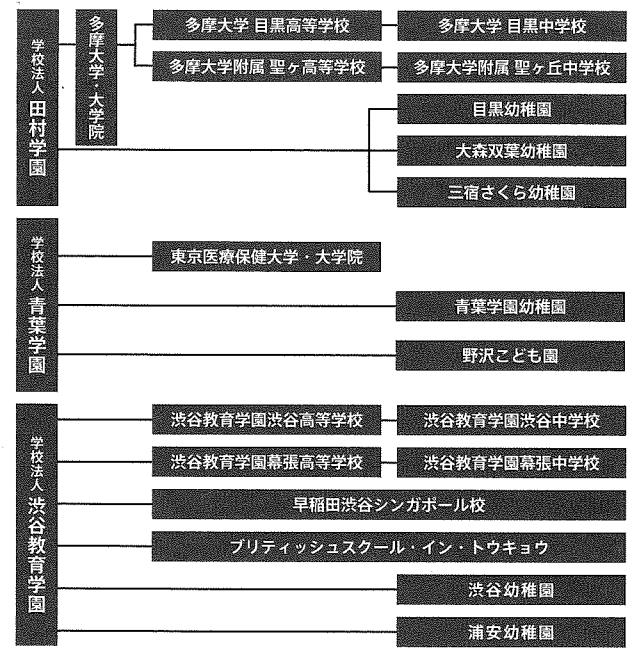
(消費支出)

人件費支出	2,835
教育研究経費支出	972
管理経費支出	513
借入金等利息支出	0
その他	177
次年度繰越支払資金	3,028
合計	7,525

人件費	2,841
教育研究経費	1,352
管理経費	544
その他	12
合計	4,749

当年度消費収入超過額 357

## 田村学園グループ (関連校)



# 平成 24 年度 経営情報学部後援会定期総会と交流会 報告

5 月 19 日 (土) 多摩キャンパス 101 教室にて、「平成 24 年度 経営情報学部後援会 定期総会並びに交流会」が開催されました。

始めに諸橋正幸 副学長より「平成 23 年度事業報告及び平成 23 年度決算」、「平成 24 年度事業計画及び平成 24 年度予算」について説明がなされました。

昨年度は、2011 年 10 月開催の学部主催「父母懇談会」への協賛や 2012 年 3 月には後援会主催で「父母懇談会 経営情報学部セミナー」を開催しました。

24 年度は昨年同様、春と秋にセミナーや父母懇談会の開催と共に、今年度もキャリア支援講座など学生の活動に直接関わるところに経済的な補助を行っていくことが承認されました。

引き続いて、平成 24 年度経営情報学部後援会役員の選出と承認が行われ、新会長は原山武敏 氏にお引受けいただきました。

定期総会後は、会場をアゴラに移し、教員との交流会が行われました。後援会員と教員が直接交流し、教育の現場と家庭との貴重な情報交換の場となりました。



多摩大学は1989年（平成元年）に開学し、2014年（平成26年）に創立25周年を迎えます。志あふれる人材を多数輩出し、平成日本と並走してきた多摩大学。伝統と変革の歴史を振り返ることで、多摩大学の未来をつくる。それがこのコーナーです。

第一回は、初年度大学案内の衝撃的ポスター。教員が志を拓き学生に伝える姿は、今も変わりません。

## 就任者全員が勢揃いした初年度の大学案内

### 「志立大学の誇り」

日本を愛した建築家ブルーノ・タウトに光り輝く理想都市のスケッチがあったが、私には聖ヶ丘に建つ多摩大学の白い建物が知の理想都市に思えた。各界の最先端を担っていた先生方が集り、志高く世界や日本の明日を熱く語り、それが伝播して学生たちは心に多摩大プライドを燃やした。その志と誇りのマグマは、私たちには永遠である。

望月 照彦 教授

新しい何かを創造するには、難しいことや大変なことが数多くありますが、その「新しい何か」が持っている未知なる領域は、わたしたちに「未来」を見つめさせてくれるもののです。開学した多摩大学の未来が、とにかく何らかの形でわたしたち開学スタッフの未来と重なるんだなあ、と思った時の不思議で新鮮な気持ちは、今も持ち続けているつもりです。

中村 その子 教授

私は多摩大学で最古参の教員になってしまった。25年前、赤坂のTBRビルディングの開学準備室で野田一夫、中村秀一郎、尾高敏樹先生の強力な布陣に囲まれながら、そして警咳に接し、感化されながら、理想に燃えていた時期を懐かしく思い出します。多摩大学も四半世紀を過ぎようとしていますが、激動の社会変化に翻弄されず、軸のないような教育改革に盲従せず、50年先、100年先を見据えながら、多摩大学独自の戦略構築を、これから多摩大学を背負っていく教職員の方々に切に期待するところです。 飯田 健雄 教授

開学時、巨大パネル版の写真を駅や公共スペースで眺め、そこに写る先生方の凛としたお姿を、一員として誇らしく思ったことを懐かしく思い出します。ラウンジでは教授法について口角泡を飛ばし、情熱をもって学生と向き合う。それは多摩大学の伝統として継承されています。初代学長 野田一夫先生のお言葉「学生の学生による学生のための多摩大学」を引き継いでまいります。 梅澤 佳子 准教授

初年度の大学案内の表紙写真を見ると、いかに多摩大学の教授陣が個性的であったかがわかる。現在の多摩大学の教授陣は個性的であろうか？学生諸氏の個性を育めているであろうか？また、個性と並んで重要な協調性等を大事にしているであろうか？今改めて過去を振り返り、望ましい未来へと歩んでいくにあたり、多くの示唆を与えてくれる一枚である。

清松 敏雄 准教授



初年度大学案内の表紙写真。教員就任予定者全員の名前を記したこの写真が、学生募集のポスターとして首都圏の主要駅構内に貼り出され、話題を呼びました。